

日蓮大聖人御書全集

ほうもんもう

よう

こと

法門申さるべき様の事

新版
1653
〜
1663

ほうもんもう

よう こと

法門申さるべき様の事

ぶんえい ねん

文永 6 年 ('69)

48 さい

さんみぼう

ほうもんもう

様

法門申さるべきよう。

せんちやく

打 置

ほけきよう

だいに

かん

いま

選択をばうちおきて、まず、法華經の第二の卷の「今こ

さんがい

もん ひら

しやくそん

われ

しんぷ

とう

さだ

の三界は」の文を開いて、釈尊は我らが親父なり等、定め

お

了わるべし。

ほとけ

われ

ふぼ

げてん

いずれの仏か我らが父母にてはおわします。外典

さんぜんよかん

ちゆうこう

に じ

詮

そうろう

ちゆう

三千余卷にも忠孝の二字こそせんにて候なれ。忠はま

こう いえ

い

もう

そうろう

げてん

ないてん

た孝の家より出ずとこそ申し候なれ。されば、外典は内典

しよもん

こころ

ないてん

違

そうろう

ひと

そんぴ

じようげ

の初門。この心は内典にたがわず候か。人に尊卑・上下

おや ころ

過

さだ

はありというとも、親を孝するにはすぎずと定められたる

か。

しゃくそん

われ

ふぼ

いちだい

しろうぎよう

ふぼ

こ

おし

釈尊は我らが父母なり。一代の聖教は父母の子を教え

きようぎよう

なか

てんじよう

りゆうぐう

てんじく

たる教経なるべし。その中に、天上・竜宮・天竺なん

むりようむへん

おんきよう

かんど

にほん

どには無量無辺の御経ましますなれども、漢土・日本には

ごせん

しちせんよかん

わずかに五千・七千余卷なり。

きようぎよう

しだい

しろうれつとう

わたくし

わきま

難

これらの経々の次第・勝劣等は、私には弁えがとう

そうろう

ろんじ

だいし

せんとく

まつだい

ひと

ち

え 超

候。しかるに、論師・大師・先徳には末代の人の智慧こえ

か　ひとびと　りょうけん　もち

がたければ、彼の人々の料簡を用いるべきかのところに、

けこんしゅう　ごきよう　しきよう　ほつそう　さんろん　さんじ　にぞう　さんてん

華嚴宗の五教・四教、法相・三論の三時・二蔵、あるいは三転

ぼうりん　いつしけつ

法輪（一紙欠）

せそん　ほうひさ　のち　かなら　まさ　しんじつ　と

「世尊は法久しくして後、要ず当に真実を説きたもうべ

もん　ほけきよう　い　こんく　みようせつ　ぶっせつ

し」の文は、また法華経より出でて金口の明説なり。仏説

おお　わ　にと　たと　せけん　ふぼ　ゆず

すでに大いに分かれて二途なり。譬えば世間の父母の譲り

ぜんぱん　ごはん　せけん　ぜんぱん　ごはん　によらい

の前判・後判のごとし。はたまた世間の前判・後判は如来の

こんげん　学　こう　ふこう　こんぽん　ぜんぽん　ごはん　よう

金言をまなびたるか。孝・不孝の根本は、前判・後判の用・

ふよう　こと　起

不用より事おこれり。

こう立て申すならば人々さもやとおぼしめしたらん時、
た もう ひとびと 思 とき

申すべし。
もう

そもそも、浄土の三部経等の諸宗の依経は、当分の
じょうど さんぶきようとう しょしゅう えきよう とうぶん

四十余年の内なり。世尊は我らが慈父として「未顕真実」
しじゅうよねん うち せそん われ じぶ みけんしんじつ

ぞと定めさせ給う御心は、かの四十余年の経々に付けと
さだ たも みこころ しじゅうよねん きようぎよう つ

おぼしめししか、また「真実を説きたもう」の言にうつれ
思 しんじつ と ことば 遷

とおぼしめししか。心あらん人々、御賢察候べきかとし
思 味 ころ ひとびと ごけんさつそうろう

ばらくあじわいて、よも、仏程の親父の、一切衆生を一子
味 ほとけほど しんぷ いつさいしゅじよう いっし

とおぼしめすが、真実なることをすてて未顕真実の不実な
思 しんじつ 捨 みけんしんじつ ふじつ

ることにつ^つけとはおぼしめさじ。

ほけきよう

遷

そうら

しじゆうよねん

きようぎよう

捨

さて、法華經にうつり候わんは、四十余年の經々をす

うつ

そうろう

きようぎよう

なむ

てて遷り候べきか、はたまた、かの經々ならびに南無

あみだぶつとう

捨

うつ

そうろう

思

阿弥陀仏等をばすてずして遷り候べきかとおぼしきとこ

ぼんぷ

わたくし

はか

ぜひ

恐

ろに、凡夫の私の計らい、是非につけておそれあるべし。

ほとけ

もう

しんぷ

おお

あお

待

ほとけさだ

仏と申す親父の仰せを仰ぐべしとまつところに、仏定め

のたま

しょうじき

ほうべん

す

とううんぬん

ほうべん

もう

て云わく「正直に方便を捨つ」等云々。「方便」と申すは、

むりようぎきよう

みけんじんじつ

もう

うえ

ほうべんりき

無量義經に「未顕真実」と申す上に「方便力をもつてす」

もう

ほうべん

ほうべんりき

ほうべん

うち

と申す方便なり。「方便力をもつてす」の「方便」の内に、

じようどさんぶきようとう

しじゅうよねん

いつさいきよう

いちじいつてん

も

浄土三部経等の四十余年の一切経は一字一点も漏るべか

しじゅうよねん

きようぎよう

捨

ほけきよう

い

らざるか。されば、四十余年の経々をすてて法華経に入ら

ひとびと

せけん

こう

ふこう

知

ぶつぼう

なか

だいいち

ざらん人々は、世間の孝・不孝はしらず、仏法の中には第一

ふこう

もの

の不孝の者なるべし。

ゆえ

だいに

ひゆほん

い

いま

さんがい

ないし

故に、第二の譬喩品に云わく「今この三界は乃至また

きようしよう

しんじゆ

とううんぬん

しじゅうよねん

きようぎよう

教詔すといえども、信受せず」等云々。四十余年の経々

捨

ほけきよう

なら

ぎよう

ひとびと

しゆ

し

しん

をすてずして法華経に並べて行ぜん人々は、主・師・親の

さんにな

仰

もち

ひとびと

きよう

もう

し

しん

三人のおおせを用いざる人々なり。「教」と申すは師・親の

教

しよう

もう

しゆじよう

しようちよく

ほとけ

おしえ、「詔」と申すは主上の詔勅なるべし。仏は

えんぶだいいち けんおう しょうし けんぷ しじゅうよねん きょうぎよう

閻浮第一の賢王・聖師・賢父なり。されば、四十余年の経々

付 ほけきよう 遷 ひとびと か

につきて法華経へうつらず、またうつれる人々も彼の

きょうぎよう 捨 遷 さんとくそな しんぷ おお

経々をすててうつらざるは、三徳備えたる親父の仰せを

もち ひと てんち なか 住 もの

用いざる人、天地の中にすむべき者にはあらず。

ふこう ひと じゅうしよ きよう つぎしも さだ い

この不孝の人の住処を経の次下に定めて云わく「もし

ひとしん ないし ひと みようじゅう あびごく い とう

人信ぜずして乃至その人は命終して、阿鼻獄に入らん」等

うんぬん ほけきよう 謗 遷 ひとびと

云々。たとい法華経をそしらずとも、うつり付かざらん人々、

ふこう とがうたが ふこう もの あくどううたが

不孝の失疑いなるべし。不孝の者は、また悪道疑いな

ゆえ ほとけ あびごく い さだ たま

し。故に、仏は「阿鼻獄に入らん」と定め給いぬ。いかに

にぜん

きようぎよう

しゆうしん

かた

ほけきよう

うつ

いわんや、爾前の経々に執心を固くなして法華経へ遷ら

ぜんどう

せん

なか

ひと

な

ほうねん

ざるのみならず、善導が「千の中に一りも無し」、法然が

しやへいかくほう

書

あびじごく

のが

「捨閉閣抛」とかけるは、あに阿鼻地獄を脱るべしや。そ

しよけ

だんな

もう

およ

の所化ならびに檀那は、また申すに及ばず。

きようしよう

しんじゆ

もう

こう

ふた

「また教詔すといえども、信受せず」と申すは、孝に二

せけん

こう

こう

ふこう

げてん

ひとびと

知

つあり。世間の孝の孝・不孝は、外典の人々これをしりぬ

ないてん

こう

ふこう

ろんじとう

じつきよう

べし。内典の孝・不孝は、たとい論師等なりとも、実教を

わきま

ごんきよう

ろんじ

なが

う

すえ

ろんじ

弁えざる権教の論師の流れを受けたる末の論師などは、

ごしよう知

難

すえずえ

ひとびと

後生しりがたきことなるべし。いかにいわんや、末々の人々

をや。

ねはんぎよう さんじゅうし い じんしん う そうじよう ど

涅槃經の三十四に云わく「人身を受けんことは爪上の土、

さんあくどう お じつぼうせかい ど しじゅう ごぎやく ないし

三悪道に堕ちんことは十方世界の土。四重・五逆あり乃至

ねはんぎよう ぼう じつぼうせかい ど しじゅう ごぎやく ないし

涅槃經を謗ずることは十方世界の土、四重・五逆なく乃至

ねはんぎよう しん つめ うえ ど 説 そうろう

涅槃經を信ずることは爪の上の土」なんどととかれて候。

まつだい ごぎやく もの ほうぼう もの じつぼうせかい ど

末代には、五逆の者と謗法の者は十方世界の土のごとしと

見

みえぬ。

とうじ ごぎやくざい 作 もの つめ うえ ど つく

されども、当時、五逆罪つくる者は爪の上の土、作らざ

もの じつぼうせかい ど ほどそちら きようもん 虚 言

る者は十方世界の土程候えば、經文そらごととなるように

見 そうろう

詳

勘

見 そうら

ふこう

もの

みえ候を、くわしくかんがえみ候えば、不孝の者を

ごぎやくざい

もの

もう

そうろう

そうじ

ごぎやく

もう

五逆罪の者とは申し候か。また相似の五逆と申すことも

そうろう

ぜんおう

しょうほう

じつほう

ひろ

たま

候。さるならば、前王の「正法・実法を弘めさせ給え」

そうろう

いま

おう

ごんぼう

そうじ

ほう

たつと

てんしほんみよう

と候を、今の王の権法・相似の法を尊んで、天子本命の

どうじよう

しょうほう

みてら

ごきえ

薄

ごんぼう

じやほう

てら

道場たる正法の御寺の御帰依うすくして、権法・邪法の寺

くにぐに

おお

出

来

ぐしや

まなこ

ぶつぼうはんじよう

の国々に多くいできたれるは、愚者の眼には仏法繁盛と

見

ぶつてん

ちしや

おんまなこ

ふる

しょうほう

てらでら

漸

失

みえて、仏天・智者の御眼には古き正法の寺々ようやくう

そうら

いち

ふこう

けん

ふぼ

うじでら

捨

せ候えば、一には不孝なるべし、賢なる父母の氏寺をすつ

に

ほうぼう

にほんこくとうせい

るゆえ。二には謗法なるべし。もししからば、日本国当世は

くにいちどう

ふこう

ほうぼう

くに

くに

しやかによらい

国一同に不孝・謗法の国なるべし。この国は釈迦如来の

ごしよりよう

ほとけ

そう

しんか

だいぼんでんのう

だいりくてん

まおう

御所領、仏の左右の臣下たる大梵天王・第六天の魔王に

賜

たま

たいかい

しがい

留

ほうざん

たばせ給いて、大海の死骸をとどめざるがごとく、宝山の

きよくりん

厭

くに

ほうぼう

変

思

曲林をいとうがごとく、この国の謗法をかえんとおぼすか

かんが

もう

もう

と勘え申すなりと申せ。

うえ

す

そうろうしじゅうよねん

きようぎよう

いま

そうろう

この上、「捨てられて候 四十余年の経々の今に候は、

ぞく

なん

へんきつ

もう

とう組

いかに」なんと俗の難ぜば、返詰して申すべし。「塔くむ

足代

とう組

上

き

捨

もう

あししろは、塔くみあげては切りすつるなり」なんと申す

たと

げんぎ

だいに

もん

いま

だいきよう

お

べし。この譬えは、玄義の第二の文に「今、大教もし起こ

らば、方便ほうべんの教絶きやうぜつす」と申す釈もうの心しやくなり。妙みようと申すは

「絶ぜつ」ということ、ぜつ「絶」と申すことは、この経起きやうおこらば已い

前の経々ぜん きやうぎやうを断たち止とどむと申すことなるべし。「正直しやうじきに方便ほうべん

を捨すつ」の「捨しゃ」の文字もんじの心こころ、また嘉祥かじやうの「日出ひいでぬるは

星ほしかくる」の心こころなるべし。ただし、爾前にぜんの経々きやうぎやうは塔とうの

あししろなれば、切きりすつるとも、また塔とうをすりせん時ときは用もち

いるべし。また切きりすつべし。三世さんぜの諸仏しよぶつの説法せつぽうの儀式ぎしきか

くのごとし。

また俗ぞくの難なんに云いわく、慈覚大師じかくだいしの常行堂等じやうぎやうどうとうの難なん、これ

をば答うべし。こた 内典の人、外典をよむ。ないてん げてん 読 得道のためにはあ

らず、才学のためか。さいがく 山寺の小児の俱舎の頌をよむ。さんじ しょうじ くしや じゆ とくどう 得道の

ためか。でんぎよう 伝教・慈覚は八宗を極め給えり。じかく はつしゆう きわ たま 一切経をよみ

給う。たも これみな法華経を詮と心え給わん梯磴なるべし。ほけきよう せん こころ 得たま ていとう

また俗の難に云わく「いかに、さらば御房は念仏をば申しぞく なん い

給わぬ」。たま

答えて云わく、こた い 伝教大師は二百五十戒をすて給いぬ。でんぎようだいし にひやくごじっかい 捨 たま 時

にあたりて法華円頓の戒にまぎれしゆえなり。ほつけえんどん かい 紛 当世は諸宗

の行多けれども、ぎようおお 時にあたりて念仏をもみなして法華経をとき

ぼう

きんせきまよ

易

とな

そうら

れい

謗ずるゆえに、金石迷いやすければ唱え候わず。例せば、

ほとけじゅうにねん

あいだ

じょうらくがじょう

な

忌

たま

げてん

仏十二年が間、常楽我浄の名をいみ給いき。外典にも

かんしよく

祭

ひ

忌

赤

もの

忌

ふこうこく

もう

寒食のまつりに火をいみ、あかき物をいむ。不孝国と申す

くに

こうよう

ひと

通

ぎ

国をば、孝養の人はとおらず。これらの義なるべし。

せんちやく

弄

立

いくたびも選択をばいろえずして、まずこうたつべし。

ごじぶつどう

ほうもんもう

めんぼく

書

また「御持仏堂にて法門申したりしが面目」なんどかか

そうろう

ふしぎ

覚

そうろう

れて候こと、かえすがえす不思議におぼえ候。そのゆ

そう

うえいちえんぶだい

有

難

ほうもん

えは、僧となりぬ、その上一閻浮提にありがたき法門なる

とうがく

ぼさつ

思

べし。たとい等覚の菩薩なりとも、なにとかおもうべき。

ぼんてん たいしやくとう われ しんぷ しやかによらい ごしよりよう
まして梵天・帝釈等は、我らが親父・釈迦如来の御所領を

預 しょうほう そう やしな もの 付 そうろう

あずかりて、正法の僧を養うべき者につけられて候。

びしゃもんとう してんげ しゅ かど守 ししゅう おうとう

毘沙門等は四天下の主、これらが門まぼり、また四州の王等

びしゃもんてん しょじゅう うえ やまとあきつしま ししゅう

は毘沙門天が所従なるべし。その上、日本秋津島は四州の

りんおう しょじゅう およ しま おさ おさ

輪王の所従にも及ばず、ただ島の長なるべし。長なんに

仕 もの め かみ 書 うえ めんぼく

つかえん者どもに「召されたり」「上」なんどかく上、「面目」

もう 詮 にちれん 卑

なんど申すは、かたがたせんずるところ日蓮をいやしみて

書 そう にちれん でし きよう 上 はじ

かけるか。総じて、日蓮が弟子は、京にのぼりぬれば、始

忘 のち てんま付 もの 狂

めはわすれぬようにて、後には天魔つきて物にくるう。

少 輔 ぼう

和 ござう

体

てん

憎

しよう房がごとし。わ御房もそれていになりて、天のにくま

被

上

幾

じつみよう

変

れかぼるな。のぼりていくばくもなきに、実名をかうる

条

もの 狂

さだ

言 葉 付

おと

きよう

じよう、物ぐるわし。定めてことばつき、音なんども京な

鼠

蝠

蝠

めりになりたるらん。ねずみがかわほりになりたるように、

とり

鼠

いなかほつし

きよう

鳥にもあらず、ねずみにもあらず、田舎法師にもあらず、京

ほつし

似

少 輔 ぼう

覚

ことば

法師にもにず。しよう房がようになりぬとおぼゆ。言をば、

田 舎

悪

ただいなかことばにてあるべし。なかなかあしきようにて

あ

そんじよう

書

おきほうおう

べじつみよう

有るなり。「尊成」とかけるは、隠岐法皇の御実名か。か

ふしぎ

たがた不思議なるべし。

知

そうろう

とうせい

こうそう

しんごん

てんだいとう

かつ、しられて候ように、当世の高僧、真言・天台等の

ひとびと

おん 祈

かな

前々

もう

そうろううえ

人々の御いのりは叶うまじきよし、ぜんぜんに申し候上、

ことしかまくら

しんごんしとう

こそ

へんじょうなんし

ほうおこな

今年鎌倉の真言師等は去年より変成男子の法行わる。

りゆうべん

じたん

限

しち

はつびやくよにん

隆弁などは自歎することかぎりなし。七・八百余人の

しんごんし

とうじ

てんだい

だいほう

ひほうつ

ぎよう

真言師、東寺・天台の大法・秘法尽くして行ぜしが、つい

虚

ぜんしゆう

りつそうとう

いちどう

ぎよう

にむなしくなりぬ。禅宗・律僧等、また一同に行ぜしか

叶

にちれん

かな

もう

ふしぎ

どもかなわず。日蓮が「叶うまじ」と申すとて、「不思議な

脅

そうら

みな

虚

しょうじ

り」なんどおどし候いしかども、皆むなしくなりぬ。小事

こんじよう

おん

祈

かな

知

だいじ

たる今生の御いのりの叶わぬをもつてしるべし。大事たる

ごしようかな

後生叶うべしや。

しんごんしゅう かんど ひろ

はじ てんだい いちねんさんぜん ぬす と

真言宗の漢土に弘まる始めは、天台の一念三千を盗み取

しんごん きようそう さだ り ほん しよう いん しんごん

つて真言の教相と定めて理の本とし、枝葉たる印・真言を

しゅう た しゅう てんだいしゅう た くだ じよう ほうぼう こんげん

宗と立て、宗として天台宗を立て下す条、謗法の根源た

けごん ほつそう さんろん てんだいしゅうにほん とき

るか。また華嚴・法相・三論も、天台宗日本になかりし時

ほうぼう 知 さんろん てんぎようだいしえんしゅう かんが 出

は謗法ともしられざりしが、伝教大師円宗を勘えいだし

たま のち ほうぼう しゅう 知 とうせい しんごんとう

給いて後、謗法の宗ともしられたりしなり。当世、真言等

しちしゅう もの ほうぼう だいじ おん 祈 かな

の七宗の者、しかしながら謗法なれば、大事の御いのり叶

覚 てんだいしゅう ひとびと わ しゅう しよう

うべしともおぼえず。天台宗の人々は、我が宗は正なれ

じゃ たしゅう どう わ しゅう しょう 知 もの

ども邪なる他宗と同ずれば、我が宗の正をもしらぬ者な

たと ひがし まよ もの たいとう にし まよ とうざい まよ

るべし。譬えば、東に迷う者は対当の西に迷い、東西に迷

じつぽう まよ

うゆえに十方に迷うなるべし。

げどう ほう もう もと ないどう い そうろう

外道の法と申すは、本、内道より出でて候。しかれど

げどう ほう ないどう かたき しょうしゅう ほけきよう

も、外道の法をもつて内道の敵となるなり。諸宗は法華經

出 てんだいしゅう さいがく てんだいしゅう うしな

よりいで、天台宗を才学として、しかも天台宗を失うな

てんだいしゅう ひとびと わ しゅう じつぎ し

るべし。天台宗の人々は、我が宗は実義とも知らざるゆ

わ しゅう 滅 わ み 軽 知

えに、我が宗のほろび我が身のかろくなるをばしらずして、

たしゅう たす わ しゅう うしな ほつけしゅう ひと

他宗を助けて我が宗を失うなるべし。法華宗の人が、

ほけきよう だいもく

なんみようほうれんげきよう

唱

なむ

法華經の題目・南無妙法蓮華經とはとなえずして、南無

あみだぶつ つね とな

ほけきよう うしな もの

れい

阿弥陀仏と常に唱えば、法華經を失う者なるべし。例せば、

げどう さんぼう た

なか ぶつぼう もう

なむまけいしゆらてん

外道は三宝を立つ。その中に仏宝と申すは南無摩醯修羅天

とな

ぶつでし

ほんじゃ

さんき

もう

なむ

と唱えしかば、仏弟子は翻邪の三帰と申して南無

しやかむにぶつ もう

ないげ

標

釈迦牟尼仏と申せしなり。これをもつて内外のしるしとす。

なむ あみだぶつ

じようどしゆう

えきよう

だいもく

こころ

南無阿弥陀仏とは浄土宗の依經の題目なり。心には

ほけきよう ぎようじゃ そん

なむ あみだぶつ もう

ほうばい

法華經の行者と存すとも、南無阿弥陀仏と申さば、傍輩は

ねんぶつしや 知

ほけきよう

捨

ひと

えいざん

念仏者としりぬ。法華經をすてたる人とおもうべし。叡山の

さんぜんにん

むね

わきま

おうほう

捨

えいざん

三千人は、この旨を弁えずして、王法にもすてられ、叡山

滅

をもほろぼさんとするゆえに、自然に三宝に申すこと叶わ

とう もう たも

ず等と申し給うべし。

ひとふしん い

てんだい

みようらく

でんぎようとう

おんしやく

わ

人不審して云わく「天台・妙楽・伝教等の御釈に、我

ほけきよう

いつさいきよう

こころ得

もの

あくどう

がように法華経ならびに一切経を心えざらん者は悪道に

お もう しやく

もう

げん

さん

せん

さん

い

墮つべしと申す釈やある」と申さば、玄の三・籤の三の「已

こんとう

とう

出

たも

でんぎようだいし

ろくしゆう

がくしや

にほん

今当」等をいだし給うべし。伝教大師、六宗の学者・日本

こく じゅうしにん

か

い

けんかいろん

げ

い

むかし

国の十四人を呵して云わく、顕戒論の下に云わく「昔は

せいちよう

こうず

き

いま

ほんちよう

ろくとう

み

まこと

斉朝の光統を聞き、今は本朝の六統を見る。実なるかな、

ほっけ

とうもん

けごん

しんごん

ほっそう

さんろん

法華の『いかにいわんや』は」等文。華嚴・真言・法相・三論

ししゅう

か

い

えびようしゅう

い

しんらい

しんごんけ

の四宗を呵して云わく、依憑集に云わく「新来の真言家は

すなわ

ひつじゆ

そうじよう

ほろ

くとう

けごんけ

すなわ

ようごう

則ち筆受の相承を泯ぼし、旧到の華嚴家は則ち影響の

きぼ

かく

ちんぐう

さんろんしゅう

だんか

くつち

わす

しょうしん

軌模を隠す。沈空の三論宗は弾呵の屈恥を忘れて称心の

すい おお

じやくう

ほつそうしゅう

ぼくよう

きえ

なみ

せいりゆう

酔を覆い、著有の法相宗は僕陽の帰依を非して青竜の

はんぎよう

はら

とううんぬん

てんだい

みようらく

でんぎようとう

しんごんとう

判経を撥う」等云々。天台・妙楽・伝教等は、真言等の

しちしゅう

ひとびと

かい

じよう

全

ほうぼう

七宗の人々は、たとい戒・定はまつたくとも謗法のゆえ

あくどうのが

さだ

に悪道脱るべからずと定められたり。いかにいわんや、

ぜんしゅう

じようどしゅうとう

もちろん

しかん

禅宗・浄土宗等は勿論なるべし。されば、止観はひとえ

だるま

破

そうろう

とうせい

てんだいしゅう

に達磨をこそはして候めれ。しかるに、当世の天台宗の

ひとびと

しよしゅう

とくどう

許

しよしゅう

ぎよう

人々は、諸宗に得道をゆるすのみならず、諸宗の行を

奪 と わ ぎよう

うばい取って我が行とすること、いかん。

とうせい ひとびと しんごんしゅう ふしん

当世の人々、ことに真言宗を不審せんか。

た もう 様 にほんこく はっしゅう

しんごんしゅうおお

わ

立て申すべきよう。日本国に八宗あり。真言宗大いに分

にりゅう

とうじ てんだい

ほっそう

かちて二流あり。いわゆる、東寺・天台なるべし。法相・

さんろん けごん とうじ しんごんとう だいじようしゅう

じよう え だいじよう

三論・華嚴・東寺の真言等は大乗宗、たとい定・慧は大乗

とうだいじ しょうじようかい たも

かい しょうじよう

なれども、東大寺の小乗戒を持つゆえに戒は小乗なる

たいだいしゆしろう もの しょうじようしゅう

えいざん しんごんしゅう

べし。退大取小の者、小乗宗なるべし。叡山の真言宗

てんだい えんどん かい 受 まった しんごんしゅう かい

は天台円頓の戒をうく。全く真言宗の戒なし。されば、

てんだいしゅう

えんどんかい

しんごんしゅう

とうもう

天台宗の円頓戒におちたる真言宗なり等申すべし。しか

ぎすとう

こうそう

な

てんだいしゅう

借

いっこうしんごんしゅう

るに、座主等の高僧、名を天台宗にかりて、一向真言宗に

ほつけしゅう

下

えいざんみなほうぼう

おん

祈

よつて法華宗をさぐるゆえに、叡山皆謗法になりて御いの

驗

りにしるしなきか。

と い

てんだいほつけしゅう

対当

しんごんしゅう

な

削

問うて云わく、天台法華宗にたいして真言宗の名をけず

しょうもん

らるる証文いかん。

こた

い

がくしょうしき

でんぎようだいしきく

い

てんだい

答えて云わく、学生式へ伝教大師作なり」に云わく「天台

ほつけしゅうねんぶんがくしょうしきいつしゆ

ねんぶんどしや

ひと

かしわばらせんてい

てんだい

法華宗年分学生式一首。年分度者の人へ柏原先帝、天台

ほつけしゅうでんぼうしや

くわ

ほつけしゅうてんだい

ねんぶん

こうにん

法華宗伝法者を加えらるゝ。およそ法華宗天台の年分は弘仁

くねん

えいざん

じゅう

いちじゅうにねんさんもん

い

りようごう

九年より〇叡山に住せしめ、一十二年山門を出でず、両業

しゅがく

しかんごう

もの

しやなごう

もの

とううんぬん

を修学す。およそ止観業の者〇およそ遮那業の者」等云々。

けんかいろんえんぎ

じょう

い

しんほつけしゅう

くわ

こ

顕戒論縁起の上に云わく「新法華宗を加えんことを請う

ひよういつしゅ

しやもんさいちよう

けこんしゅう

ににん

てんだいほつけしゅう

ににん

とう

表一首。沙門最澄〇華嚴宗に二人、天台法華宗に二人」等

うんぬん

い

てんだい

ごう

ににん

いちにん

だいびるしやなきよう

云々。また云わく「天台の業に二人へ一人は大毘盧遮那経を

よ

いちにん

まかしかん

よ

てんだいしゅう

読ましめ、一人は摩訶止観を讀ましむ」。これらは天台宗

うち

しんこんしゅう

い

そうら

そうろう

かしようがんねん

の内に真言宗をば入れて候いてこそ候めれ。嘉祥元年

ろくがつじゅうごにち

きやく

い

みぎ

につとうえしややく

でんとうほつしい

六月十五日の格に云わく「右、入唐廻請益・伝灯法師位・

えんにん

ひよう

い

ふ

たず

てんだいしゅう

ほんちよう

つた

円仁の表に称わく『伏して尋ぬれば、天台宗の本朝に伝

えんりやくにじゅうしねん

にじゅうごねん

ひと

てんだい

わることは○延暦二十四年○二十五年、特り天台の

ねんぶんどしやににん

たま

いちにん

しんごん

ごう

なら

いちにん

しかん

年分度者二人を賜う。一人は真言の業を習い、一人は止観の

ごう まな

すなわ

てんだいしゅう

しかん

しんごん

りようごう

業を学ぶ○しからば則ち、天台宗の止観と真言との両業

かん むてんのう

すうけん

とううんぬん

えいざん

は、これ桓武天皇の崇建するところなり』と」等云々。叡山

てんだいしゅう

対

しんごんしゅう

な

削

において、天台宗にたいしては真言宗の名をけずり、

てんだいしゅう

ほね

しんごん

にく

天台宗を骨とし真言をば肉となせるか。

まつだい

およ

てんだい

しんごん

りようしゅう

なか悪

しかるに、末代に及んで、天台・真言の両宗、中あし

ほね

にく

わ

ざす

いっごう

しんごん

ほね

ゆうなりて、骨と肉と分かれ、座主は一向に真言となる。骨

もの

だいしゅう

たぶん

てんだいしゅう

にく

者

なき者のごとし。大衆は多分は天台宗なり。肉なきものの

ぶつぽう

あらそ

せけん

そうろん

しゅつたい

ごとし。仏法に諍いあるゆえに世間の相論も出来して、

えいざんしず

ちようか

煩

おお

だいじ

ないない

叡山静かならず、朝下にわずらい多し。これらの大事を内々

そん

ほうもん

教

能

は存すべし。この法門は、いまだおしえざりき。よくよく

ぞんち

存知すべし。

ねんぶつしゆう

ほけきよう

そむ

じようど

さんぶきよう

付

また、念仏宗は、法華経を背いて浄土の三部経につくゆ

あみだぶつ

しろう

しゃかぶつ

悔

しんごんし

だいにち

えに、阿弥陀仏を正として釈迦仏をあなずる。真言師、大日

詮

しゃかによらい

悔

かい

をせんとおもうゆえに、釈迦如来をあなずる。戒において

だいしろうこと

しゃくそん

ほん

よぶつ

しろうみよう

は、大小殊なれども釈尊を本とす。余仏は証明なるべ

しよしゆうこと

しゃか

あお

しし

なか

むし

し。諸宗殊なりとも、釈迦を仰ぐべきか。「師子の中の虫、

しし 食

ぶつきよう

げどう

破

ないどう

うち

師子をくらう。仏教をば外道はやぶりがたし。内道の内に

こと出 来

ぶつどう

うしな

ほとけ

ゆいごん

ぶつどう

事いできたりて仏道を失うべし。仏の遺言なり。仏道の

うち しょうじよう

だいじよう

うしな

ごんだいじよう

じつだいじよう

内には小乗をもつて大乘を失い、権大乘もて実大乘

うしな

げどう

しょうじよう

ごん

を失うべし。これらはまた外道のごとし。また小乗・権

だいじよう

じつだいじよう

ほけきよう

ひとびと

反

ほけきよう

大乘よりは実大乘・法華経の人々がかえりて法華経をば

うしな

だいじ

そうろう

失わんが大事にて候べし。

ぶつぼう

めつ

ふめつ

えいざん

えいざん

ぶつぼうめつ

仏法の滅・不滅は叡山にあるべし。叡山の仏法滅せるか

いこくわ

ちよう

亡

えいざん

しょうほう

う

のゆえに、異国我が朝をほろぼさんとす。叡山の正法の失

だいてんまにほんこく

しゅつたい

ほうねん

だいにちとう

み

するゆえに、大天魔日本国に出来して、法然・大日等が身

い み はし おうしんとう おんみ 移 す
に入り、これらが身を橋として王臣等の御身にうつり住み、

えいざんさんぜんにん

い

しだんなかふわ

かえりて叡山三千人に入るゆえに、師檀中不和にして

ごきとう

驗

ごきしょう

さんぜん

だいしゅとう

御祈禱しるしなし。御祈請しるしなれば、三千の大衆等、

だんな

捨

果

檀那にすてはてられぬ。

おうしんとう

てんだい

しんごん

がくしや

む

と

い

また、王臣等、天台・真言の学者に向かつて問うて云わ

ねんぶつ

ぜんしゅとう

ごくり

てんだい

しんごん

いち

問

く「念仏・禅宗等の極理は天台・真言とは一か」ととわせ

たま

な

てんだい

しんごん

借

こころ

わきま

こうそう

給えば、名は天台・真言にかりてその心も弁えぬ高僧、

てんま

抜

こた

い

ぜんしゅとう

ごくり

てんだい

しんごん

天魔にぬかれて答えて云わく「禅宗の極理は天台・真言の

ごくり

みだねんぶつ

ほけきよう

かんじん

こた

もう

極理なり。弥陀念仏は法華經の肝心なり」なんと答え申す

ねんぶつしゃ

ぜんしゅうとう

奴

原

てんまの

なり。しかるを、念仏者・禅宗等のやつばらには天魔乗り

移

とうせい

てんだい

しんごん

そう

ちえ

賢

うつりて、当世の天台・真言の僧よりも智慧かしこきゆえ

まった

ぜん

遥

てんだい

しんごん

こ

ごく

に、「全くしからず。禅ははるかに天台・真言に超えたる極

り

しよきよう

りじん

われ

しゅじよう

げみ

理なり、あるいは云わく「諸教は理深、我ら衆生は解微

き

きよう

そうい

とくどう

もう

なり。機・教、相違せり。得道あるべからず」なんと申す

てんだい

しんごんとう

がくしや

おうしんとう

だんなみなうば

取

ゆえに、天台・真言等の学者、王臣等の檀那皆奪いとられ

ごきえ

げんしん

がきどう

お

とも

にく

食

ぶつ

て御帰依なければ、現身に餓鬼道に堕ちて友の肉をはみ、仏

しん

怒

だんな

呪詛

ねんねん

わざわ

お

神にいかりをなし、檀那をずそし、年々に災いを起こし、

わ

しろうじん

ほんぞん

だいこうどう

きようしゅしやくそん

焼

あるいは我が生身の本尊たる大講堂の教主釈尊をやき

払 しょうじん みろくぼさつ 滅 すす

はらい、あるいは生身の弥勒菩薩をほろぼす。進んでは

きようしゆしやくそん おんてき しりぞ とうらい みろく しゆつせ

教主釈尊の怨敵となり、退いては当来の弥勒の出世を

あやま 狂 そうろう だいざい きようろん 説

過たんとくるい候か。この大罪は経論にいまだとかれ

ず。

だいざい えいざんさんぜんにん とが く げ ぶ け

また、この大罪は叡山三千人の失にあらず、公家・武家の

とが にほんいつしゆう じようげばんにん いちにん ほうぼう

失となるべし。日本一州、上下万人、一人もなく謗法なれ

だいぼんてんのう たいかん てんしやうだいじんとう りんごく しゆうにん おお

ば、大梵天王・帝桓ならびに天照太神等、隣国の聖人に仰

付 ほうぼう 矯 れい くにたみ

せつけられて謗法をためさんとせらるるか。例せば、国民た

きよもりにゆうどう おうほう 傾 けっく さんのう

りし清盛入道、王法をかたぶけたてまつり、結句は山王・

だいぶつでん

焼

払

てんしやうだいじん

しやうはちまん

さんのうとう

大仏殿をやきはらいしかば、天照太神・正八幡・山王等

与 力

たま

みなもとのよりよし

すえ

よりとも

おお

くだ

よりきせさせ給いて、源頼義が末の頼朝に仰せ下して、

へいけ

滅

こくどあんのん

いま

いつこくこそ

ぶつしん

平家をほろぼされて国土安穩なりき。今、一国挙つて仏神の

かたき

わ くに

くに りやう

ひと

敵となれり。我が国にこの国を領すべき人なきかのゆえ

だいもうここく

お

れい

しんたん

こうらいとう

に、大蒙古国は起るとみえたり。例せば、震旦・高麗等は、

てんじく

次

ぶつこく

か

くにぐに

ぜんしゆう

ねんぶつしゆう

天竺については仏国なるべし。彼の国々、禅宗・念仏宗に

もうこ

亡

にほんこく

か

にこく

でし

なりて蒙古にほろぼされぬ。日本国は彼の二国の弟子なり。

にこく

亡

くにあんのん

くに

二国のほろぼされんに、あにこの国安穩なるべしや。国を

助

いえ

思

ひとびと

ぜん

ねん

やから

きやうもん

たすけ家をおもわん人々は、いそぎ禅・念の輩を経文の

戒

ごとくいましめらるべきか。

きょうもん

経文のごとくならば、仏神、

ぶっしん

にほんこく

日本国にましまさず。かれを請じまいらせんと術は、お

しょう

すべ

かな

ぼろけならでは叶いがたし。

せけん

じょうげばんにんい

はちまんだいぼさつ

しょうじき

いただき

まず世間の上下万人云わく「八幡大菩薩は正直の頂に

宿

たも

べつ

住

処

とううんぬん

せけん

しょうじき

ひと

やどり給う。別のすみかなし」等云々。世間に正直の人な

だいぼさつ

住

処

ぶつぽう

なか

ほけきよう

ければ、大菩薩のすみかましまさず。また仏法の中に法華経

しょうじき

おんきよう

ほけきよう

ぎようじゃ

ばかりこそ正直の御経にてはおわしませ。法華経の行者

だいぼさつ

おん

住

処

にほんこく

なければ、大菩薩の御すみかおわせざるか。ただし、日本国

にちれんいちにん

せけん

しゅつせ

しょうじき

もの

そうら

には日蓮一人ばかりこそ世間・出世、正直の者にては候え。

ゆえ　こさいみようじにゆうどう

む

ぜんしゆう

てんま

所為

その故は、故最明寺入道に向かつて「禪宗は天魔のそいな

後　かんもん

告知

にほんこく　みな

るべし」。のちに勘文もてこれをつげしらしむ。日本国の皆

ひと　むけんじごく　お

あ　しやうじき　もう

人、無間地獄に墮つべし。これほど有ることを正直に申す

者　せんだい　有　難

すいさつ

ものは先代にもありがたくこそ。これをもつて推察あるべ

ほか　しやうじま

しやうにん　ことば　飾

し。それより外の小事曲ぐべしや。また、聖人は言をかざ

もう

あらわ

のち

知

しやうにん

もう

らずと申す。また、いまだ顚れざる後をしるを聖人と申す

にちれん　しやうにん　いちぶん

ほうもん

にじゆう

か。日蓮は聖人の一分にあたれり。この法門のゆえに二十

よそ　追

けつく　るざい

およ

み

おお

傷

被

余所おわれ、結句、流罪に及び、身に多くのきずをこうぼり、

でし　数　多　ころ

ひかん

超

ご子　胥

劣

弟子をあまた殺させたり。比干にもこえ、伍しそにもおとら

だ い ば ぼ さ つ げ どう こ ろ し し そ ん じ や だ ん み り お う く び 刎

ず。提婆菩薩の外道に殺され、師子尊者の壇弥利王に頸をは

劣

はちまんだいぼさつ

ねられしにもおとるべきか。もししからば、八幡大菩薩は、

にちれん いただき

離

たま

ひと いただき

日蓮が頂をはなれさせ給いては、いずれの人の頂にか

住 たま

にちれん

くに もち

すみ給わん。日蓮をこの国に用いずば、いかんがすべきと

歎

そうろう

もう

なげかれ候なりと申せ。

にちれんぼう

もう

そうろう

ぶつぼさつ

しよだいぜんじん

また、日蓮房の申し候は、仏菩薩ならびに諸大善神を

帰

かえしまいらせんことは別の術なし。禅宗・念仏宗の寺々

ひと

うしな

そう

戒

えいざん

こうどう

つく

を一つもなく失い、その僧らをいましめ、叡山の講堂を造

りようぜん

しやかむにぶつ

おんたましい

しょう

い

り、霊山の釈迦牟尼仏の御魂を請じ入れたてまつらざ

ほか

しよじん

帰

たも

しよぶつ

くに

たす

らん外は、諸神もかえり給うべからず。諸仏もこの国を扶け

たま

難

もう

給わんことはかたしと申せ。